

構成素性と句構造（１）

—構成素構造のテストと Xバー理論—

牛江 一裕*

キーワード：句構造、構成素、等位接続、移動、照応

I はじめに

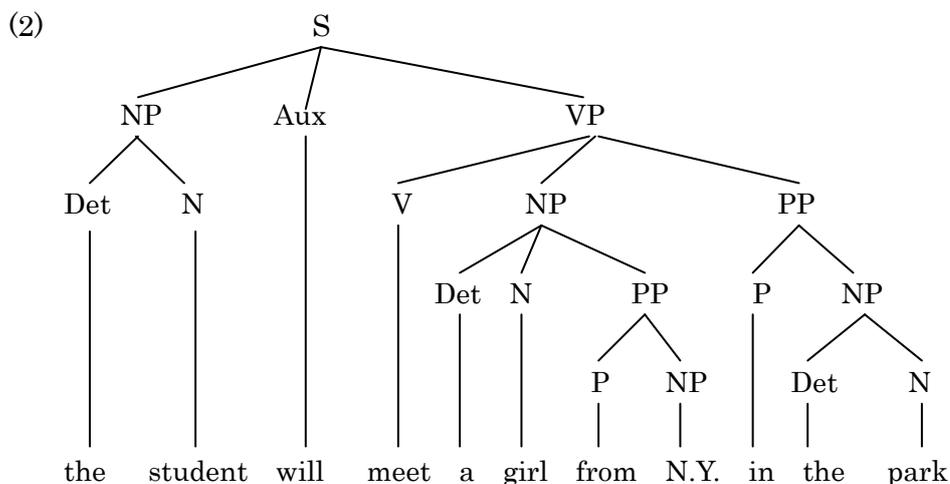
生成文法の枠組みでの統語論研究において、その中心的課題である文の句構造の解明という課題の手立てとして、これまでさまざまな構成素構造を調べるテストが用いられてきた。それらのテストを適用してみると場合によっては矛盾した結果が得られることは以前から指摘されてきたが、最近の研究ではそれらの一見矛盾した結果が生じないような統語構造の理論がいくつか提案されてきている。本稿ではそのような研究のうち特に注目し値すると思われる Pesetsky(1995)の Cascade syntax と Layered syntax という平行的な2つの構造をたてる理論、および Phillips(1996,1998)の Incrementality hypothesis に基づく理論を取り上げ、Ushie(1994)以降著者が提案してきている平行的多重構造を用いる仮説との比較検討を行い、今後の句構造研究の方向性を探りたい。

II 構成素構造を調べるテスト

この節では、これまで生成文法研究で用いられてきている主な構成素構造を調べるテストを概観する。ここで取り上げるテスト自体は広く知られているものばかりであるが、次節以降の議論の基盤となるものであるため、それらのテストの結果が意味するところをあらためて確認しておくことにする。

まず、次の文の構造から考えてみよう。

(1) The student will meet a girl from New York in the park.



* 埼玉大学教育学部英語教育講座

(1)の文は(2)のような構造を持つとされることがある。¹⁾ この構造は概ね正しいと言えるが、詳しく調べてみるといくつか正確ではない部分も含まれている。そのことを構成素構造のテストで確かめてみることにする。

1 移動

もしある単語の連鎖をその本来の位置から文中の別の位置に動かすことができれば、その連鎖は構成素であると言える。移動できるのは構成素のみである。

- (3) a. This book, I really like.
b. Flora: Do you like Belgian beer and Belgian wine?
Ben: [Belgian beer] I like __, but [Belgian wine] I hate __.
c. A girl from New York, the student met __ in the park.
d. *A girl, the student met __ from New York in the park.
- (4) a. John wants to pass the exam, and [pass the exam] he will __.
b. *John wants to pass the exam, and [pass] he will __ the exam.
c. The student said he would meet a girl from New York in the park, and [meet a girl from New York in the park] he really did __.
- (5) In the park, the student met a girl from New York.

文中の名詞句などの要素を文頭に移動しその文のトピックを明示する(3)の操作は話題化(topicalization)と呼ばれる。²⁾ (4)は動詞句前置(VP Preposing)で、カッコで示した動詞句が文頭に移動されている。前置されるのは動詞句であって、(4b)のように動詞だけを単独で文頭に移動し、目的語を元の位置に残すことはできない。前置詞句も文頭に移動できる場合があり、前置詞句前置(PP Preposing)と呼ばれる。

(1)の文について考えてみると、(3c)は可能だが、(3d)のように a girl だけを移動することはできない。(2)で表されているように、a girl from New York は名詞句という構成素だが、a girl だけでは1つのまとまりになっていないのである。(4c)からわかるように、カッコで囲まれた部分が動詞句という構成素になっている。また、文中に助動詞がない場合には、時制を担う要素として do が現れる。(5)から in the park が前置できることがわかる。これらのことから、今調べた限りにおいては(2)の句標識が正しく(1)の構造を表しているということがわかる。

上で見た移動規則はすべて左方向への移動であるが、右側への移動もある。

- (6) We brought __ into the country six boxes of excellent French wine.
- (7) a. We employed two people __ last week from European Union country.
b. Six women __ appeared with yellow hats.

(6)は重名詞句転移(Heavy NP Shift)あるいは複合名詞句転移(Complex NP Shift)と呼ばれ、節中の重い(あるいは複雑な)名詞句を右方向に移動する操作である。また、(7)は名詞句からの外置(Extraposition from NP)と呼ばれる。これら右方移動も構成素のテストとして用いることができる。

2 分裂文・擬似分裂文

英語には分裂文(cleft sentence)と呼ばれる構文があり、(6)のような一般形をしている。これは、文中のある要素を X の位置に取り立てて焦点(focus)として際立たせるもので、X と文の残りの要素 Y とが分裂する形になる。

(8) It is/was X that Y.

- (9) a. It was a girl from New York that the student met in the park.
b. It was in the park that the student met a girl from New York.
c. *It was a girl from New York in the park that the student met.

ここで重要なのは、X の位置にこられるものは構成素としてまとまっている要素であり、原則として名詞句と前置詞句に限られるということである。³⁾ これをテストとして用いると、(9a, b)は可能だが(9c)は不可能であることから、(2)で示されているように語の連鎖がまとまっていることがわかる。

同じような働きをする構文として擬似分裂文(pseudo-cleft sentence)と呼ばれるものがある。Wh 語によって導かれる節が主語となり、be の後ろに焦点となる要素が起こる。擬似分裂文の焦点の位置には分裂文の場合より広い範囲の要素が現れるが、やはり構成素に限られる。⁴⁾

- (10) a. What Frank washed yesterday was [his shirts].
b. What the student did was [meet a girl from New York in the park].

(10a)では名詞句の his shirts が焦点になっているが、(10b)では動詞句が be の後ろに現れており、(2)のようにまとまっていることがわかる。

これらの例からわかるように、構成素構造を調べるためにある種の文のフレームを用いることができる。⁵⁾

3 等位接続

次もフレームの 1 つだが、等位構造を構成素のテストとして用いることができる。and や but によって複数の句や語などを結びつける等位接続(coordination)は、原則として同じ種類の構成素同士に限られる。⁶⁾ 等位接続できれば、それらは構成素であり、しかも同じ種類のものであるといえる。

- (11) a. The student and the teacher met a girl in the park. (NP and NP)
b. The student went to the park and met a girl. (VP and VP)
c. The student met a girl with long hair and with blue eyes. (PP and PP)

このように、名詞句・動詞句・前置詞句などさまざまな種類の構成素を等位接続詞によって結ぶことができる。

等位接続と移動が組み合わさったような形のものとして右枝節点繰り上げ(Right Node Raising: RNR)と呼ばれる操作がある。

- (12) a. Frank washed __, and Dick ironed __, the shirts.

- b. The student will __, but the teacher won't __, meet the girl.

この操作も構成素を調べるテストとしてよく使われる。この場合には等位接続された2つの節のそれぞれから同じ要素が文末に抜き出された形になっている。(12a)では名詞句が、(12b)では動詞句が、それぞれ抜き出されている。出来上がった形を見ると and で結ばれている部分は構成素ではなくなっているが、RNR で抜き出すことができるのは構成素に限られるので、抜き出すことができればその要素は構成素であると言える。

4 代用(substitution)

ある単語の連鎖が代名詞など適切な代用形式(proform)で置き換えることができるならば、それは構成素であると言える。(1)の文で考えてみると、the student を he に、a girl from New York を her に、in the park を there にそれぞれ1語で置き換えることができる。代名詞は必ず名詞句全体に置き換わる。下のように(1)の a girl の部分だけを her で置き換えることはできない。

- (13) *The student met her from New York in the park.

このことから、(1)では a girl だけでは構成素になっていないということがわかる。The student met a girl という文の場合なら、a girl を her に置き換えることができる。このように、同じ語からなる連鎖でも場合によって構成素になっている場合もあれば、そうでない場合もある。(1)の文での the student は構成素だが、The student in the room put the book on the shelf という文においては the student は構成素ではない。したがって、ある単語の連鎖が構成素かどうかということは、特定の文と切り離して判断することはできない。

次に動詞句に置き換わる do so という代用形をみてみよう。

- (14) A signal which should have turned to red failed to do so.

この場合 do so は turn to red の繰り返しを避けるための代用形である。つまり動詞句という構成素全体に置き換わっているのである。

削除もゼロ形の代用形での置き換えと考えることができる。

- (15) a. If John buys a new car, Bill will, too.
b. Bill will buy a new car if John does.

削除にはいろいろな種類があるが、基本的には構成素としてまとまっているものが削除可能で、(15)の場合は動詞句全体が削除されている。

代用と移動が組み合わさったものとして、Wh 疑問文がある。

- (16) a. Who will the student meet __ in the park?
b. *Who will the student meet __ from New York in the park?
c. Where will the student meet a girl from New York __?

Wh 疑問文を作るには、ある構成素を Wh 疑問詞に置き換え、さらにそれを文頭に移動

するという操作が必要になるわけであるから、Wh 疑問文を作ることができれば、その Wh 疑問詞にあたるものは構成素であると言える。⁷⁾

5 注意点

ひとつ注意すべきことは、ある連鎖がこれらのテストのいずれかにパスすれば、それは構成素であると言えるのだが、テストのどれかにパスしないからといって、それが構成素ではないとは必ずしも言えないという点である。たとえば、動詞句や節は構成素ではあるが、分裂文の焦点の位置には現れることができない。このように、その構文特有の性質や別の要因によって、ある特定のテストの結果は非文になるという場合がある。また、テストによっては確実とは言い難いものもある。次の例を考えてみよう。

- (17) a. John put the book on the table.
- b. It was the book that John put on the table.
- c. *It was the book on the table that John put.
- d. *The book on the table, John put.
- e. John put the book on the table and the glass on the shelf.
- f. *John put *both* the book on the table *and* the glass on the shelf.

(17b,e)の分裂文、(17d)の話題化の結果は、(17a)での *the book on the table* という連鎖は構成素ではないということを示している。しかし、(17e)は可能な文であるので、分裂文のテストと等位接続のテストの間で食い違いが生じていることになる。この点がまさに Pesetsky や Phillips の理論が解決しようとしている問題であり、本稿で後ほど詳しく考察する点である。ここでは、*and* での接続はその条件が緩やかであり、「完全な」構成素でなくても接続できてしまうこと、そして、より厳密な等位接続による構成素のテストとしては、*both-and* あるいは *either-or* での接続があることを指摘するにとどめる。(17f)は非文であることから、*the book on the table* は完全な構成素ではないことがわかる。

III 中間的なまとめりと X^{bar}理論

これまでみてきたテストの結果を見る限りにおいては、(2)の樹形図は(1)の文の構造を正しく表しているように思われる。しかし、句の内部構造をもう少し詳しく検討してみると、(2)は(1)の文の構造を十分には表しておらず、まだ不正確な部分があることがわかる。

1 one と do so

まず、代用形の1つである *one* を手がかりとして、名詞句の構造について考えてみよう。

- (18) a. I like this very tall girl more than that one.
- b. These [very tall men] and [very short women] don't get on.

(18a)は2通りに解釈できる。1つは one が very tall girl に置き換わっているという解釈であり、もう1つは one が girl だけに置き換わっているという解釈である。ここで問題となるのは前者で、II.4 節で考えたように代用形は構成素にのみ置き換わるとすると、very tall girl でまとまりになっているはずであり、この名詞句は this と very tall girl の2つの部分に大きく別れるということになる。つまり、語彙範疇(lexical category)N と句範疇(phrasal category)NP との間にその中間的なまとまりが存在するということである。このことは等位接続のテストで確かめることができる。(18b)では very tall men と very short women が and で結ばれており、それ全体に these が結合している。この中間的なまとまりは一般に N-bar あるいは N' と表される。

(2)の樹形図では a girl from New York という名詞句は3つ股の構造として表されているが、その構造は正しくなく、ここに N' が関係してくる。名詞の後に続く前置詞句には大きく分けると2つの種類がある。

- (19) a. Ben likes the student with long hair better than the one with short hair.
 b. *Ben likes the student of physics better than the one of chemistry.

これらの例文に現れる one が置き換わりうる可能性をみると、同じ名詞句内に現れる前置詞句ではあっても(19a)と(19b)では性質が違ってくる。(19a)での with short hair などは one の外に出ることができるが、(19b)での of chemistry などはそうすることができず、必ず主要部の名詞と一緒にあって one に置き換わらなければならない。

動詞句についても、同じような現象がみられる。

- (20) a. John will buy the book on Tuesday, and Bill will do so on Thursday.
 b. John will buy the book on Tuesday, and Bill will do so as well.
 c. John says he will buy the book on Tuesday, and buy the book on Tuesday he surely will.
 d. John will put the book on the table, and Bill will do so as well.

(20a)の on Thursday は do so の外に出ているが、必ずしも動詞句の外にあるとは言えない。なぜなら、(20b)では on Tuesday という前置詞句が do so の中に含まれており、動詞句の中にあるといえるからである。動詞句前置でも on Tuesday は buy the book とともに前置することができる(20c)。それに対して、(20d)の on the table は必ず do so に含まれ、その外に出ることはできない。このことから、(20a-c)では buy と the book で中核的なまとまりを形成しており、その外側に on Tuesday がついて、全体として動詞句を形成していると考えられる。この中核的なまとまりは V' と表される。(20d)では put the book on the table で V' になっており、前置詞句の構造的な位置が(20a-c)とは異なる。

名詞句や動詞句におけるこれら2種類の前置詞句は一般的にどのような統語的・意味的性質を持つものであろうか。

2 補部と付加部

他動詞の目的語や(21a)での put の目的語と場所を表す前置詞句は、動詞と強く結びついており省略することができない要素である。

- (21) a. John put the book on the table.
b. *John put the book. / *John put on the table. / *John put.

これらはある語彙項目がその性質として要求する要素であり、そのような要素はその語彙項目の補部(complement)と呼ばれる。それに対して、(20a, b)の時を表す前置詞句や(1)での場所を表す前置詞句は本来的に動詞が要求する要素ではなく、それらを取り去ってしまっても文の文法性にはまったく影響を及ぼさない。このような要素は付加部(adjunct)と呼ばれる。意味的には(19a)の with long hair などは制限的關係節と同じように制限的な修飾語句として働いている。(19b)の of physics は主要部の名詞 student に対して、ちょうど study physics での他動詞の目的語が持つ役割を果している。また、同じ機能を持つ要素同士のみ等位接続が可能となる。(22a)がだめなのは、2つの異なった働きをする前置詞句を等位接続しているからだと説明できる。

- (22) a. *a student [of physics] and [with long hair] (補部と付加部)
b. a student [of physics] and [of chemistry] (補部と補部)
c. a student [with long hair] and [with blue eyes] (付加部と付加部)

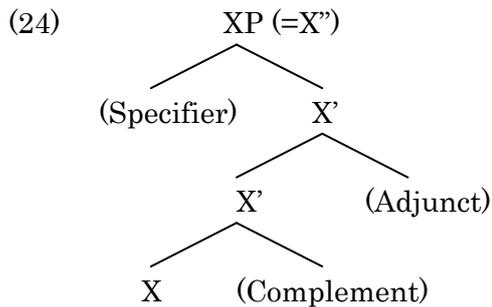
このような補部と付加部の違いは句の構造上の違いとしても反映される。句の構成はまず主要部とその補部が結びつき、1つのまとまり(構成素)を形成する。上で見た中間的な大きさのまとまりである N' と V' がそれにあたる。それに付加部が結びついて同じ種類の中間的なまとまりとなる。したがって、補部が後置された特殊な場合を除いて補部は必ず付加部より主要部に近い位置に現れることになる。また、異なるレベルの要素を等位接続することはできない。そして、one は N' に、do so は V' にそれぞれ置き換わると考えることにより、補部は one や do so の外に出られないという III.1 節で見た結果が導かれる。⁸⁾

中間的なまとまりに指定部(specifier)が結びつき、最大投射(maximal projection)、言い換えればある語彙範疇を中心としその性質を反映した一番大きなまとまりが形成される。指定部はそれに続く内容(主要部+補部)を指定・限定する働きをする。名詞句では冠詞や指示詞などの限定詞や(23b)の所有形がこれにあたる。動詞の指定部の位置には、最終的に文の主語として現れる要素がおこり、それが主語の位置に移動するという動詞句内主語仮説が採られることが多い。

形容詞句や前置詞句についても同様の階層構造が見られる。

- (23) a. VP: [(the enemy) [destroy [the city]]]
b. NP: [an [analysis [of the sentence]]] /
[the enemy's [destruction [of the city]]]
c. AP: [very [fond [of coffee]]]
d. PP: [quite [in [agreement]]]

英語ではどの語彙範疇をとっても、最大投射は基本的に次のような構造を持つ。⁹⁾



Xは範疇をその値としてとる変項である。付加部はX'の前に付加されても後に付加されてもよく、そして何層にでも階層的に付加されうる。語彙範疇に共通してみられる構造の階層性を捉えた原理は、Xバー理論(X-bar Theory)と呼ばれる。

3 機能範疇

これまで語彙範疇とその投射を見てきたが、Xバー理論ではすべての範疇について基本的には(24)の構造が成り立つと仮定するので、文を構成する上で重要な役割を果たしている機能範疇(functional category)も(24)のように投射した構造を持つと考えられる。

(2)のSはどのような範疇で、どのような構造を持つか考えてみよう。語彙範疇と同じように文にも主要部があり、その文全体の種類・性質を決めている部分であると考えれば、時制文であるかないか、時制を持たない非定形文であればその種類はなにか、というようにその要素によって決まるもの、ということになるであろう。

- (25) a. They expected [John *would* win the race].
 b. They expected [John *to* win the race].
- (26) a. I don't really want to go to the dentist's, but I know I *should*.
 b. I know I should go to the dentist's, but I just don't want *to*.
 c. *I know I should go to the dentist's, but I just don't *want*.

(Radford *et al.*, 1999:296)

(25)を見ると助動詞の *would* と *to* は節の中で同じ位置を占めており、どちらもその後ろに不定形の動詞(句)を要求する。また(26)では、補部の削除を許すという点で、不定詞の *to* は典型的な動詞とは異なり、典型的な助動詞と同じように振舞う。そこで、これらは屈折(inflexion)と呼ばれる同じ範疇に属するものと考え、略して INFL あるいは I と表す。INFL は補部として動詞句をとり I を形成する。次のような等位接続が可能であることから、助動詞と動詞句がまとまって構成素になっていることがわかる。

- (27) a. They [will try to reduce taxes] but [may not succeed].
 b. John neither [did eat] nor [will eat].

したがって、Sは主語の名詞句を指定部としてとった IP ということになる。

次に *that*, *for*, *if* などに導かれた埋め込み文について考えてみよう。

- (28) a. I expected [*that* [she will dance after lunch]].
 b. [*For* [her to dance after lunch]] would be surprising.
 c. I wonder [*if* [she'll really get here]].

(28)において、全体として補文が平叙文であるのか、疑問文であるのかというようなことを決めている部分が斜体部である。これらは補文標識(*complementizer*)と呼ばれ、*that* は定形の平叙従属節を、*if* は定形の疑問従属節を、*for* は不定形の従属節を導く。これらの要素は補文の主要部として COMP あるいは C と表される。C はその補部として IP をとり C' を形成し、さらに指定部とともに最大投射の CP を形成する。C が IP を補部として取っていることは、C に続く連鎖が等位接続できること、また RNR が可能であることからわかる。

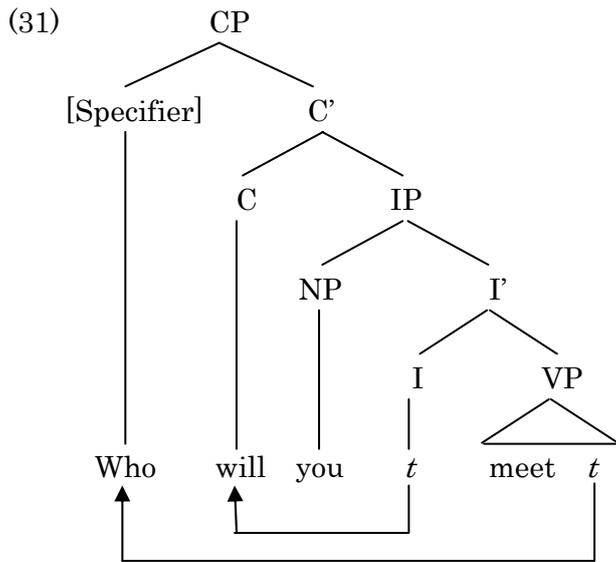
- (29) a. The book which/that [Smith praised] and [Jones panned] is on the best-seller list.
 b. A person about whom [conservatives publish denunciations] and [liberals express serious misgivings] can't be all bad.
 c. The reasons for which and the considerations despite which [Wilson called for a declaration of war] are poorly understood.

(McCawley 1998:434)

I や C などの機能範疇も語彙範疇と同じように X バー理論に従った句の構造を持つと考える理由として、次の文を見てみよう。

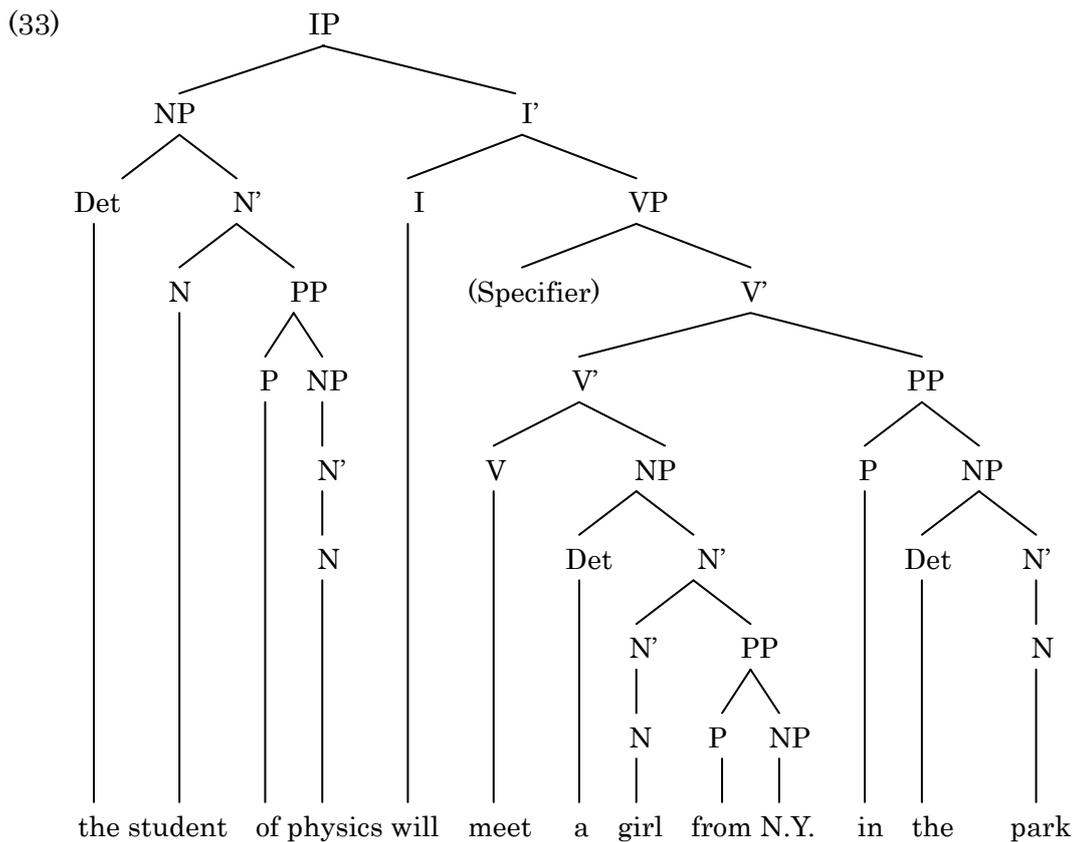
- (30) a. *I wonder { if will / will if } the teacher invite the student.
 b. *Who* will you meet this afternoon?
 c. I wonder *who* you met yesterday.

疑問文を作る規則は助動詞を主語の前に移動するが、構造上どの位置に動くのだろうか。助動詞は I の位置、すなわち IP の主要部の位置にある。このことは、(20)のように do so テストを行ってみると、助動詞は do so の外に出るので、助動詞と動詞はその2つでまとまりになっていないことからもうなずける。ここで、主要部は別の主要部の位置にのみ動きうると仮定すると、助動詞の動き先も主要部でなければならない。それが C という主要部の位置である。このように考えると、補文標識と助動詞は必ずどちらか一方しか起こりえず、両方同時には起こらないと予測される。(30a)で示されているように、事実はまさにそのとおりである。さらに、(30b, c)のような Wh 疑問文や埋め込まれた疑問文においては、CP の指定部の位置に Wh 句が移動すると考えられる。今述べたことを図示すると、次のように表すことができる。



ここまで議論してきたことに基づき、(32)の文の構造を表すと(33)のようになる。

(32) The student of physics will meet a girl from New York in the park.



4 関係節

これまで考えてきた構成素構造のテストの適用例として、また、次節以降の議論において関係節構造を問題の1つとして取り上げるため、関係節を含む名詞句の構造を見しておくことにする。詳しく調べると英語だけをとっても関係節にはさまざまな種類のもの

があるが、ここでは制限的關係節(restrictive relative clause)と非制限的關係節(nonrestrictive relative clause)についてその構造を考える。これらは表面上非常によく似ているが、統語構造上は大きく異なる。

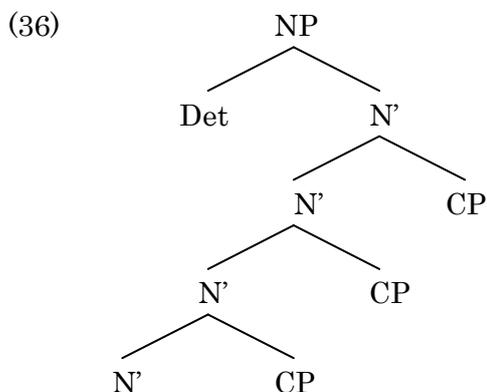
(1) 制限的關係節

制限的關係節は、III.2 節で見た付加部として N' に付加され、結合してできたものも N' となる。そのことは次のような文によって示すことができる。

- (34) a. Most [[linguists who play chess] and [philosophers who play poker]] find this book useful.
 b. Most [[theories of gravitation] and [accounts of diffraction]] are hopelessly inadequate.
 c. All [[[theories of gravitation] and [accounts of diffraction]] that have ever been published] are hopelessly inadequate.
- (35) a. Newton proposed one theory of light in 1688 and a second (one) in 1703.
 b. The theory of light that Newton proposed was less successful than the one that Huyghens proposed.
 c. The theory of light that Newton proposed that everyone laughed at was more accurate than the one that met with instant acceptance.

(McCawley 1998:382)

(34a)から、關係節を含んだ連鎖が等位接続でき構成素になっていること、そして(34b)から、主要部名詞+補部の N' という構成素とまったく同じ振る舞いをしていることがわかる。(34c)では N' が等位接続されてできた N' 全体に制限的關係節が付加されている。また、(35)からは、關係節を含んだ連鎖が削除や one 照応に関して主要部名詞+補部とまったく同じように振舞うことがわかる。これらのことから、N' に制限的關係節が付加されてできる構成素も N' であると言える。そのように考えると、(35c)で見られるような積み重ね關係節(stacked relative)は、(36)のように N' が繰り返し重なる構造を持つものとして、その存在の可能性が説明される。



(2) 非制限的關係節

制限的關係節とは異なり、N'と非制限的關係節の組み合わせは、構成素であることを示すどのテストにもパスしない。例として、次の文を考えてみよう。

- (37) a. Tom has a violin which once belonged to Heifetz, and Jane has *one* too.
b. Tom has a violin, which once belonged to Heifetz, and Jane has *one* too.
c. Some violins that have been owned by famous performers and flutes that were played by Frederick the Great are going to be sold at auction.
d. *Those violins, which were made by Cremonese masters, and pianos, which were made in nineteenth-century Paris, are expected to fetch high prices. (McCawley 1998:445-6)

(35c)や(37a)からわかるように、N'+制限的關係節の場合はまとめて削除したり one に置き換えたりすることができるが、N'+非制限的關係節の場合にはそのようにできない。(37a)の one は下線部をその先行詞として解釈できる。それに対して、(37b)では one の先行詞は violin のみであり、非制限的關係節は入りえない。つまり、「ジェーンもバイオリンを1台持っている」という意味にしかならず、「ジェーンもバイオリンを1台持っていて、それもかつてハイフェッツが所有していたものだ」という解釈はできないということである。また、(34a)や(37c)から、制限的關係節を含んだ N'同士が等位接続できることがわかるが、(37d)で示されているように、N'+非制限的關係節という連鎖は等位接続できない。さらに、非制限的關係節では制限的關係節とは異なり、一般的には積み重ねが許されない。¹⁰⁾

- (38) *John, who goes to MIT, who likes math, will get a job.

これらの事実から、制限的關係節は(24)の構造における付加部であり、(36)の構造をしているのに対して、非制限的關係節はそれとは異なる構造であることがわかる。それがどのような構造であるのかは大きな問題であり、McCawley(1998)は次に挙げる不変換詞移動(39a)、挿入節(39b)、名詞句からの外置(39c)などの構文とともに、非制限的關係節についても一般的な句構造の考え方では許されない枝が交差する構造を提案している。

- (39) a. John looked the answer up.
b. Your brother, I'm fairly sure, won't want to help you.
c. Several persons have filed suits who were injured in the accident.

(McCawley 1998:47)

ここでは非制限的關係節を含む構造の詳細に立ち入る余裕はないが、制限的關係節を含む構造とは大きく異なること、そして、非制限的關係節はその先行詞と構成素を形成していない可能性があるということを確認しておく。¹¹⁾

注

本稿は平成 11 年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)、課題番号 10610458)の援助を受けて行われた研究による成果の一部である。

1) たとえば Akmajian *et al.*(1995:158)や Aarts 1997:179)などで、文は違うが同じような趣旨の構造が示されている。もっとも、著者たちがそれらの構造を必ずしも正しいものと考えているわけではない。また、ここでは説明の便宜上、X-bar での表示ではなく従来の構造表記を用いている。

2) Gundel(1974)は話題化には 2 種類あると主張している。すなわち、(i)のようなすでに話題(旧情報、つまり、聞き手がすでに(ある程度)知っていること)となっている要素を話題化する話題話題化(topic topicalization)と、(ii)のように焦点(新情報をあらわす部分)となっている要素を話題化する焦点話題化(focus topicalization)である。

- (i) “What about John?” – “John he called.”
(「ジョンはどうした?」「ジョンには彼が電話したよ」)
- (ii) “Who did he call?” – “John he called.”
(「彼は誰に電話したの?」「ジョンにです」)

また、(i)では called に、(ii)では John に第一強制が置かれる。

3) 名詞句・前置詞句の他、ある種の副詞句や、話者によってはある種の形容詞句も分裂文の焦点になりうる。

- (i) a. It was yesterday that Frank washed his shirts.
b. It was very carefully that Marge handled the sulfuric acid.
c. It was black that he drank it.
d. ?It was deathly afraid of flying that John became.
e. *It's very unhappy that Bill is. (b, d は McCawley(1998:65)による)

4) 擬似分裂文の主語節は通例 what によって導かれるが、話者によってはそれ以外の Wh 語によって導かれるものも容認される場合がある。

- (i) a. Who John was talking to is Alice.
b. Where John drove the truck is to Cleveland.
c. Why John yelled at you is because he was tired.
d. How Marge handled the sulfuric acid was very carefully.
e. *Why I stopped you was for a good reason.
f. *How long his speech lasted was for two hours. (McCawley 1998:65)

5) 移動などの操作を行うことによって元の形では多義であった文も 1 つの意味にしか解釈できなくなることがある。これは、移動前の構造がその移動が可能であるような構造に決まってしまうからである。日本語で例を挙げておく。

- (i) a. 次郎は汗だくになって逃げる泥棒を追いかけた。
- b. 次郎が追いかけたのは[汗だくになって逃げる泥棒]だった。
- c. 次郎が汗だくになって追いかけたのは[逃げる泥棒]だった。

(ia)では汗だくなのは次郎とも泥棒ともどちらにも取れるが、焦点の位置に取り出すと、(ib)では泥棒、(ic)では次郎としか解釈できなくなる。(ia)は2つの構造が対応するが、焦点として取り出すことができるのは構成素だけであるので、(ib,c)ではそもそもその取り出しが可能であるような構造が持っている解釈しかなくなってしまう。

6) 同じ種類の構成素であっても必ずしも等位接続が可能であるというわけではなく、果たす機能が異なると接続することができない。(ia)では *of physics* は *student* の補部、*with long hair* は制限的修飾語句としての付加部という機能を果たしている。逆に、たとえば(ib)の副詞と前置詞句の場合のように、その働きが同じであれば異なった範疇でも接続が可能となることもある。

- (i) a. *John met a student [of physics] and [with long hair].
- b. We walked [slowly] and [with great care].

7) Wh 移動の他に主語助動詞倒置も構成素を調べるテストとして利用できる。Akmajian *et al.* (1995:142-154)などで詳しく述べられているように、yes/no 疑問文を作る規則を正しく述べようと思えば、どうしても主語というまとまりに言及する必要がある。主語とはSに直接支配された(その間にひとつも節点が存在していない)名詞句と定義されるのであるから、「主語に言及する」ということは構造というものを用いていることにはほかならない。逆の見方をすれば、主語として働いている要素は構成素であると言える。

8) 補部の働きをする前置詞句が *of* 以外の前置詞に導かれている場合、あるいは補部として働く要素が前置詞句ではない場合は、*one* の外に出ることができる。また、*of* で導かれた前置詞が補部として働いていても、*one* の外に出られる場合もある。

- (i) a. An *argument* with Bill is less fruitful than *one* with John.
- b. The *prospect* for peace is better than the *one* for victory.
- c. The *claim* that Japanese cars are economical was not as relevant as the *one* that American cars are poorly made.
- d. I agreed to the *plan* to go to Japan, but I didn't agree to the *one* to go to Canada.
- e. I saw the *picture* of Raquel Welch and Irving saw the *one* of Lana Turner. (今西・浅野 1990:230)

前置詞ごとのより多くの例については、牛江(1999)を参照のこと。

さらに、*one* 照応の先行詞は構造関係だけでは規定できず、主要部名詞とそれに隣接する要素との間に成り立つ意味関係によって制約が課される。(Cf. 今西・浅野 1990:231)

9) 句の内部の構成要素とその階層的な関係は英語でも日本語でも同じと考えられるが、

¹¹⁾ Emonds(1979)も McCawley と同じく非制限的關係節が先行詞と構成素を成していない構造を提案しているが、枝は交差しない構造を与えている。Ushie(1980)は Emonds(1979)の分析を事実・理論両面からの問題点を挙げて批判し、非制限的關係節がその先行詞と構成素を成している構造、具体的には非制限關係節は N'にではなく最大投射の NP に付加されるという提案を行っている。

引用文献

- Aarts, Bas (1997) *English Syntax and Argumentation*, Macmillan, Houndmills.
- Akmajian, Adrian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer, and Robert M. Harnish (1995) *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*, 4th ed., MIT Press, Cambridge, MA.
- Emonds, Joseph (1979) "Appositive Relatives Have No Properties," *Linguistic Inquiry* 10:2, 211-43.
- Gundel, J. K. (1974) *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Doctoral dissertation, University of Texas at Austin. Reproduced by IULC (1977).
- 今西典子, 浅野一郎 (1990) 『照応と削除』新英文法選書第 11 卷, 大修館, 東京.
- McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd ed., University of Chicago Press, Chicago.
- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Phillips, Colin (1996) *Order and Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- Phillips, Colin (1998) "Linear Order and Constituency," ms., University of Delaware.
- Radford, Andrew, Martin Atkinson, David Britain, Harald Clahsen, and Andrew Spencer (1999) *Linguistics: An Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Ushie, Kazuhiro (1980) "Remarks on Nonrestrictive Relatives in English," *Studies in English Linguistics* 8, 53-84, Asahi Press, Tokyo.
- Ushie, Kazuhiro (1994) "Syntactic Dual Structures," *Synchronic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, ed. by Shuji Chiba et al., 557-566, Liber Press, Tokyo.
- 牛江一裕 (1999) 「One 照応と平行的多重構造」『埼玉大学紀要 教育学部(人文・社会科学)』第 48 卷第 2 号, 15-26.